

資料館の小部屋

その1

現在、歴史民俗資料館は収蔵庫の空調設備改修工事のため、休館中です。展示をご覧いただけません。今月から4回にわたり、学芸員おすすめの所蔵品を紹介いたします。第1回は、中世の荘園絵図です。

「長久三年摂州細川荘大絵図」

「荘園」は、10～15世紀を中心に発展した、貴族や寺社が私的に所有した土地のことです。荘園絵図は、その荘園を描いた絵図の総称です。

今回紹介する地図は、現在の細河地域にあった荘園「細川荘」を描いたもので、歴史民俗資料館が所蔵する絵図の中で最も古いものです。また、この時期の池田市域を描いたものが、ほかには見つかっていないことから大変貴重な資料といえます。

大きさは縦94cm、横190cm、東を上にし、猪名川を挟んで、西から五月山の方角を望んだ景色を描いています。全体に暗い印象の画面に、木々の緑、川の青、建物の赤など、彩色が施されています。山の尾根などを外周するように、朱色の

◀長久三年摂州細川荘大絵図



線が引かれており、細川荘の範囲を示しています。

細川荘は、関白・藤原忠実(1078～1162)の在世中にできた、摂関家の荘園です。細川荘の名は、歌人として

有名な藤原定家の日記『明月記』建仁元年(1201)10月25日条などにもみえます。

ところで、画面右下に記された「長久三年」は西暦1042年で、細川荘が成立したとされる年代よりも数十年古い年号です。なぜ年代差があるのかは、はっきりしていません。ちなみに、この絵図が制作されたのは、木々の描き方や紙の劣化具合から、16世紀前半と考えられ、古い元図をこの時代に書写した可能性が指摘されています。

荘園絵図から見る細川荘

ここでは、写真では分かりづらいですが、自然物や建造物など「描かれたもの」に注目して、中世の細川荘の姿をみてみましょう。

まず、2本の川が画面左から流れ、右手で合流しています。真ん中を蛇行するのが久安寺川(余野川)、下に位置するのが猪名川です。川は、時代を経ても大きく変化しないものとして、古絵図と現在の状況を比較するときの目安になります。画面右半分に「東山」「中河原」「木部」

「吉田」「古江」など、現在の町名と同じ地名が点在しており、その下には家並みが描かれているところもあります。比較すると、2本の川とそれぞれの集落の位置関係は、現在とほぼ変わりありません。

この絵図から、細河地域が中世から今まで、長く人びとの暮らしが営まれた場所であることが裏付けられました。

また、画面にはいくつか堂舎や塔、鳥居が描かれています。こうした寺社は、荘園絵図の上では、目印として描かれる場合と、その絵図や荘園に密接にかかわりがあるため描かれる場合の、二つが考えられます。後者ならば、他より誇張して描かれることが多いのですが、この絵図では、特に強調されて描かれた寺社は見当たりません。その代わりではありませんが、画面の中央に「安養院」と記された堂舎や塔があります。「安養院」は久安寺(伏尾町)の旧名で、この位置にあるということは、もしかしたら、久安寺がこの絵図の制作に関係したからかもしれません。

今回、紹介した絵図は、歴史民俗資料館の再開後に展示する予定です。この内容以外にも絵図にはさまざまなことが描かれていますので、一度直接見て確かめていただければと思います。機会がありましたらご来館ください。

◆問い合わせは歴史民俗資料館
☎75113019